



たより

新たな年を心に残す……

西松 布咏



昨年の1月、京都の旅で「面白きこともなき世を面白くすみなすものは心なりけり」高杉晋作の言葉に出会った。

令和四年はウクライナ戦争や安倍晋三襲撃事件、自分の周辺でも思いがけないことばかりが続ぎ、その度にこの言葉を思い出し心を失わぬようかろうじて唄い続けて来た。

歳を重ねるに従いさしたる夢がなくとも好きなことを続けられるだけで幸せと思ふようになり美紗の会の稽古を中心に淡々とした日々が過ぎて行つた。

その中で5月の仁和寺金堂での「光と闇のあい」と題した奉納演奏を無事終えることが出来たのはものみな全てに感謝の心を絶やさなかったお陰かと心

底嬉しく弛まぬ芸道への精進を心に誓つた。

そして麗らかな青空と共に訪れた新年の令和五年。寒さに弱いので日課となつた朝の散歩は時折となつたが、2日早朝まだ闇の空気を縫つて歩きだすと空には月がまんまるに煌々と。やがてゆつくりと薄墨色になった月が隠れ浅葱色の空となつて明けてゆく。道端の花は寒気に耐えながら水仙や石菖の黄色が寂しげに佇んでいるが、椿や山茶花は冬の寒さを行燈のように紅く照らしてくれる。

椿はポタリと潔く散る。山茶花は可憐にひとひらず散つてゆく。若い時はくつきりとした椿が好きで「未練ご心を掻き立てて濡れて震える寒椿」などと我が恋の切なさや声高に唄つたものだが、今は一片づつ人知れず散る山茶花が愛おしく思う。などと心の中で呟きながら、1時間あまりの朝の散歩を終える。

こうして新年の休みは日常と変わらず過ごしたが弟子の一人が「富本」の「お梶」「松風」を習いたいので録音してほしいと年末にSD Cardを送つてきたので、そろそろ稽古を始めなければと三味線を弾き始めた。

この2曲は三十六年前2回めのリサイタル「恋すれば唄」以来唄っていないので、思い出すまで時間が掛かると覚悟して臨んだが、唄っているうちに身体から昔の思い出と共に苦労して覚えた節付けが蘇ってきた。

しかし中々曲を完成するまでには至らない。舞台上で唄うために費やした時間を取り戻すにはまた新たな時間が必要であることを実感した。

後進に残さなければと、数年前から時折那須高原で小唄、端唄、地唄の録音が続けているが富本の存在はすっかり忘れていた。27歳の時、石川譚月師から富本を習つて欲しいと懇願され十年余り修行する。

師が十一代富本豊前を襲名し、亡くなられる寸前に病室で私に後を継いで欲しいと仰つたことを昨日のことのように思い出した。

その後どこの世界にもあるような跡目騒動があり、私は富本から遠のいてしまった。

千七百四十九年に常磐津から分派し清元、新内を加え豊後四派と言われる浄瑠璃。中でも富本は歌舞伎になくはならないほど一世を風靡したが恐らく現在この富本を継ぐ邦楽家はいないのではないか。久し振りに稽古をしながらそんな事を思つたり、七つ揺りと言われる難解で微妙な節を残しておかなければ……と切実に思ふに至つた。

令和五年は穏やかに淡々と散歩をしたり料理をしたりしながら唄い続けて行けたらと思つていたが、どうやらその心は片隅に置かれてしまふそうである。年賀状に「心を残す……新たな年を三筋の糸を通して残心の意味を深めてゆきたい」と書いた。

残心と言う言葉は新聞で知つたのだがそこはかとなく深い言葉である。武道の所作の一つであるが心を残さないようにして残すこと。勝負が決まつてからの勝負である。最後まで気を抜かず集中を持続する心構えなどである。

武道は芸道に通ずるというも思う。平常心でゆとりを持ち、節度ある態度で物事や人と接する。

新しい年は心を残す……三筋の糸で心の余韻を残してゆけたらと思う。



生け花・写真 西松布咏

美紗の会に入門して

桜井 妃登美

昨年6月9日に美紗の会へ入門させて頂きました。西松師匠とのご縁は古く、今から10数年前に遡ります。

親の代から受け継いだ呉服屋を母と共に営み、お客様の山中(幸咏)さんを通じ、観客として美紗の会に伺っておりました。特に記憶に残っているのは、上野鵬外荘での会です。

師匠の糸と唄に合わせ役者さんとのドラマ仕立ての演出は、鵬外荘の雰囲気と時代背景が重なり、タイムスリップしたかの様な不思議な感覚に襲われました。師匠の芸の深さと唄声に魅了され、益々師匠のファンになってしまいました。

個人的な事ですが、母を97歳で見送り、子供達も一人前になり、12年前患った大病も癒えた今、無芸大食の私に幸咏さんが、美紗の会入門へと背中を押してくださいました。三味線はとても無理なので、師匠の糸に合わせて唄えるお稽古は楽しい時間になっています。

11月の「美紗の会」に早速出演するとは思ってもよらずそれもトップバッターとはくずつと客席側で鑑賞させて頂いて居た私が、まさかの舞台に出る立場になるとは、天国で母も驚いた事でしょう。

会の当日は、緊張マックスで、早朝から目が覚めてしまい、舞台上がるも声が震え、出番が終わってしまいました。

先輩方の糸と唄を聴きながらお稽古の大切さと、お弟子さんへの細かな気配りを忘れない師匠の優しさを肌で感じ、客席側では味わえなかった体験を致しました。

会後の食事会では、先輩の皆様ともリラックスしてお話ができました。師匠のお人柄は勿論ですが、美紗の会の方々は新参者を温かく受け入れてくださり、緊張感が解けて心地よい時を過ごす事ができました。

晩年の人生を彩る素敵な時間としてこれからもお稽古していきたいと思っています。



うつろう季節を感じて——

2022年11月28日 美紗の会 ヤリタミサコ

パリやロンドン在住の友人に聞いてみると、彼の地では秋の落葉樹は 赤や黄色に紅葉しないとのこと。ただ茶色く力サカサになるだけのようです。日本ではお花見や紅葉狩りなど季節を楽しむ伝統がありますが、海外ではそういった行事はなく、キリスト教国のクリスマスくらいでしょう。日本では万葉の昔から、うつろいゆくものを見守り・見送り、新たな季節を喜びをもって迎え、去り行く時を惜しみ、受け入れる習慣が根付いています。

人間もまた、うつろうのでしょうか。若木が円熟の方向へ向かう動きは人生の春から夏へ、盛りを過ぎた木は葉を落とし、秋から冬へ向かう。その間に積み重なった時間は人の勢いを後押しし、円熟をもたらし、ステージから降りることを促します。そんなことを感じた舞台でした。

進境著しいのが、高橋(美)さんと咏治さん。アト全般は、練習量に比例して右肩上がりで実力がアップするわけではなく、どんなに努力しても壁にぶつかってスランプになることもあります。それでも練習を続けていると、思いがけないタイミングで自分の世界をつかむことになります。テクニクだけでなく、センスだけでもなく、ミュージズの神様が微笑んだタイミングなのかもしれません。この日、自分の世界をぐっと引き寄せた楽しさと魅力を見せてくれたのが、高橋(美)さんと咏治さんです。高橋(美)さんの唄は軽いこぶしが入ることで、表現の奥行きが深まり独自の世界を築いています。咏治さんの「野ざらし」は、飄々としたおかしみと遊びの余裕が感じられる絶品でした。加えて内波さんと

高橋(輝)さんも、四月の会の時よりも唄の世界が充実してきているのがわかります。表現された叙情世界で自由に振る舞えるまで、あと半歩だと感じられます。次回が楽しみです。

その一方で忠詠さんはご引退とのアナウンスがあり、寂しい思いです。が、高橋(祥)さんと川崎さんの美声がますます輝くのを聞いて、渋い色、色気のある色、語り色が濃い唄、声の美しさを聞く唄など、美声にもいるいるあって楽しいなあと感じました。特に川崎さんは前回にも増して艶のある唄の世界を展開していて、色調を抑えた中でも色々な男女が見えてきました。

そして番外編となりますが、最も伸び盛りなのは、司会の稲垣さんの息子さんである落語家「高円寺亭若乱珍」さんでしょう。前回にもまして舞台度胸と口跡の良さが感じられます。音頭を取って観客に拍手を促し、短い掛け声でワンフレーズソングを歌うなど、聞き手の注目を集める力量がすばらしく、将来が楽しみです。

今から後の未来に発揮できる力の可能性は誰にとっても未知数ですが、より一層大きく羽ばたく可能性を感じさせる人もいます。松本さんと咏扇さんはすでに自分の世界を築いていますが、その後続く未完の魅力も大きいです。「紀伊の国」の勢いある掛け声や「牽牛花」のしとやかな風情など、松本さんは唄の風景を多彩に描いています。咏扇さんの「夕暮れ」は、川瀬巴水や杉浦非水の絵が脳裏に思い描けるほど、くつきりと情景が唄われていました。お二人は、ますますダイナミックな世界を広げるだろうと期待されます。

また、安定した実力を発揮されている典詠さんの、むずかしい民謡の節回しが入った「呼子の女」のきりりとした唄いっぷりに惚れ惚れです。悠詠さんの

「築地明石町」も、錦木清方の絵のご新造さんの声が唄っているかのような明治の和モダンな情景です。紫詠さんの「お吉椿」は高音のデリケートな表情が巧みでした。秋詠さんの「淀の川瀬」はセリフが入り、声量豊かでドラマティックな表現です。鶴詠さんの「夢の柳橋」はかつての花柳界を偲ぶ華やかさと渋さが両方表わされていました。佳詠さんの「木遣りくずし」「二上り新内」では、イキでイナセな江戸の空気が伝わってきて、「どんなにつらかるう」という歌詞にしみじみと心がこもっています。草詠さんの氣迫溢れる「豊後節浮名讀賣」は、ワンブレスが長く続き、一音の母音なのに情緒の揺れが繊細に表現されていました。豊後節は江戸幕府に禁止され



たということ、道行きの覚悟と死という美に向かう切々たる思いが伝わってきました。

最後の扇ひでさんと布詠さんの共演は、いつも以上に充実していました。「玉川」ではしっとりしんみりと湿度高く、「西行」の男おどりではわらじを履く、杖をつくなどのアクションが踊りに取り入れられ、からりと乾いた風情でした。扇ひでさんには、体の中から明るさが灯っているような魅力があります。天性の華なのでしょう。

季節はうつろい、春から秋へ、秋から春へ。人間界ではパンデミックや争いに翻弄されていても、花は咲き、紅葉は落ち葉となります。現実世界では慌ただしくても、心の中で味わう想像力は創造力につながります。その豊かさは自分の表現を充実させることでしょう。美紗の会の皆様の唄の季節がより一層充実することを期待しております。

「綱は上意」を歌う、弾く、語る

己紗 俊詠

百人一首の六十番目にこんな歌があります。

大江山 いく野の道の 遠ければまだ文も見ず

天橋立

詠み人は小式部内侍、名前からお察しのとおり、三十六歌仙のひとり、和泉式部の娘です。小式部内侍が内裏での歌合に臨む前、京の都からはるか北西、丹後の国に住んでいる母ちゃん(和泉式部)に代わりに歌を詠んでもらうんでしょう？母ちゃんから返事は来た？(意訳)とからかわれた際に咄嗟に返した歌がこれ。母からの「文」も見てなければ、そもそも丹後に足も「踏み」いれていないという見事な歌です。

鍛を引っ張られているのは吉原の素見客。江戸時代なので兜の鍛ではなく、おそらく頭巾から左右、後ろに垂らした鍛のことだと思われます。離せ、離せ、頭巾の鍛が切れるやんけ。まあ、鍛は切れてもいいけど、結ったばかりの鬘の毛が乱れるのは勘弁だわ。その様子を想像すると、かなり情けない光景です。ついに根を上げた男はこう言ってしまう。

**鍛切れるは厭いはせぬが
たった今結った鬘の毛が
損じるわ もつれるわ**

よしやれ離しやれ 鍛が切れる

さて後半、糸方が必死に三下がり糸を調べている間に、舞台は平安京の羅生門から、江戸、吉原羅生門河岸へと時空を飛んでいきます。同じ吉原でも花魁がいる華やかな吉原ではなく、河岸は格安の見世が並ぶ、かなりランクの劣る花街です。とある男がその下級の女郎に鍛を引っ張られているところから、後半の唄が始まります。

よしやれ離しやれ 鍛が切れる

大江山鬼退治のお話では、このあと、渡辺綱が茨木童子の片腕をすばと切り落とします。が、その切り落とす場面まで歌わないのが、実は「綱は上意」後半の伏線になっているように思います。ちなみに、お話ではこの羅生門での騒動のあと、茨木童子が切られた腕を取り戻すべく頼光の屋敷に侵入するというエピソードが織り込まれています。

綱も聞こえし強者に かの曲者に 両手をかけ

この主語はもちろん茨木童子です。もう鬼の形相で語ってもいいくらい。なまはげになった気分が恐ろしさを前面に出したいところです。ウチの一門は美男美女、艶女と伊達男ばかりなのでとても難しいですね。

**折しも雨風激しき後より 兜の鍛(しころ)を
引っつかみ 引き戻さんと エイツと引く**

大切なのはこの次、尋常でない轟きとともに鬼、茨木童子が登場します。じゃんーじゃんー、じゃんじゃんじゃんじゃんじゃん。なにしろ鬼のパートなわけですから、ありったけの音の強さと大音声で。

綱は当時としては超イケメンの武将として知られており、なので、この箇所を演奏したり歌ったりするときは、勇猛でありながら颯爽としたイメージが出せればいいのかな、と思っています。

綱は上意を蒙りて 羅生門にぞ 着きにける

さて、ここまでの前置きをして、本題の「綱は上意」の話です。この「綱」とは、頼光四天王のひとり、渡辺綱のことです。この渡辺綱が「上意」、つまり主君である頼光の命によって、羅生門で暴れていた酒呑童子配下の鬼のひとり、茨木童子を成敗に行く、というのが「綱は上意」の冒頭部分です。

さて、ここまでの前置きをして、本題の「綱は上意」の話です。この「綱」とは、頼光四天王のひとり、渡辺綱のことです。この渡辺綱が「上意」、つまり主君である頼光の命によって、羅生門で暴れていた酒呑童子配下の鬼のひとり、茨木童子を成敗に行く、というのが「綱は上意」の冒頭部分です。

源頼光らが活躍した大江山の鬼退治は、この時代のことでした。大江山には酒呑童子という、それはそれは恐ろしい鬼が棲んでいて、度々、一味を引き連れては京の町を襲い、都人を震え上がらせていたようです。鬼の正体は夷狄とも外来の民とも言われていますが、よくわかりません。大江山にはニッケル鉱山があって、このニッケルにかぶれて赤くなった皮膚を見て鬼と呼んだのではないかな、などなど。一番面白いのは謎のドイツ人が鬼の正体だというもの。自国から持参してきた赤ワインを飲む様が、生き血をぐくぐく飲んでるように見えたとか。





七つ過ぎには 行かねばならぬ
ああ、言っちゃったー。なんですって！嫉妬と
もに怒りがわき上がる女郎。

そこへ行かんすが こちや気にかかる

誰ぢや 誰ぢや、

どこの女のとこに行くんじゃコラ、白状せんかい！

(意訳)

鬼じゃないもの わしじゃもの

前半の伏線をここで回収します。あんたの鍔を引っ張っているのは鬼の茨木童子じゃなくて、ウチなんよ、と。脅し文句か泣き落としかは解釈の分かれるところですが、なかなか気の利いた台詞です。こう言われて結局、男のほうは、

兜も鍔もなっちもいらねえ さあさ持つてけ背負ってけー

万事休す、やけくそになった男が逃げ出す様子が目に浮かんできます。渡辺綱なら女郎の腕を一瞬で切り落としていたところが、そんなことできるはずもなく、ひたすら無様を晒す男のダメっぷりを「背負ってけー」の絶叫とともに歌い上げ、あとを三味線に託します。びよんびよんと逃げ出す男、その様子を三味線の軽快な音で語って曲の終わりととなります。

とまあ、相当自分勝手な解釈でここまで書いてきました。間違っているかもしれませんが、こんなふうにひとつの曲の背景に想像を巡らしながら歌うのは、とても楽しい時間でした。

それにしても平安時代の物語世界と、江戸の世俗にまみれた世界を三の糸を一本下げるだけでつなげた昔の人は、本当に凄いなと思います。三味線音楽、マジで深いです。

余談ですが、大江山鬼退治の話は、源頼光と頼光四天王が大江山に乗り込み、酒吞童子を酒で酔っ払わせ、その隙に酒呑の首を刎ねます。そのとき首を刎ねた太刀は、渡辺綱が茨木童子の腕を切り落とした太刀でもあるのですが、「鬼切丸(髭切)」という名前、今は北野天満宮に所蔵されています。

そしてもうひとつの余談。酒吞童子を成敗した源頼朝、彼の当時のライバルとして名を馳せたのが藤原保昌です。その保昌こそが、この原稿の冒頭に出て来た、天才歌人にして恋多き女性、和泉式部の晩年の夫でした。

「百年前の選曲リスト」

川崎 隆章

最近、放送史に関する仕事が増えてきたのだが、放送業界で放送史を扱っている人間などほとんどいないので独占状態。しかしそれは大した予算もつかないことを意味するので儲かる話などないのだが。

2025年日本の放送は百歳を迎える。1925年3月、芝浦(現・田町駅近辺)に「社団法人東京放送局」が開局。ついで大阪、名古屋にもそれぞれ社団法人の放送局ができ、思い思いの内容を放送しはじめた。

当時は英語の綴りに倣って「ラヂオ」と書かれていた。放送開始の時、東京には既に1万人近い受信者がいたが、当時のラヂオはまだスピーカーが開発されていなかったので「レシーバー」と呼ばれる、見た目はヘッドホンのイヤホンを使って一人一人聴いていた。蓄電池式の輸入ラヂオは、受信性能もいいのかわりに一台が家一軒ぶんくらいの値段。多くの人々は電池のいらぬ原始的な「鉱石ラヂオ」を用いていたが、それでもサラリーマンの月給くらいはした。とても子供のおもちゃではなかったのだ。

先日取り寄せた資料に興味深い話があった。

十七代目市村羽左衛門の父・六代目坂東彦三郎が、実はラヂオ放送開始以前からラヂオを入手し、銚子無線局から発せられていた時報電波を受信して家じゅうの時計を毎日正確にあわせていたというのだ。

それは、横浜の新富座の公演に出ていた時、たまに手元の時計が数分狂っていたため汽車を乗り逃がし、開演を送らせてしまったという苦い体験によるもので、実際、大正13年の官報を見ると、本名で無線局設置の許可がおりていた。

当然、翌年の東京放送局は開局から聴いていたのだが、当時の放送局は、アナウンサーが懐中時計を見ながら手で銅鑼やチューブラベルを叩いて時を報せていたものだから、日によって狂いがあり（打ちそなってやりなおすこともあった）彦三郎にとっても我慢ならなかったようで、毎日自宅の時計との誤差を計測し週に一度、局にはがきでレポートを送っていたという話が残っている。

当時のラヂオは、午前9時に開始し、平日は、午前はニュースや経済市況、その合間に料理献立や短い講話。昼からは正午の時報に続いて講演や音楽。夕方からはニュースにつづいて日替わりの音楽、講演、芸能が放送され、9時半に時報で放送終了した。番組の企画はアナウンサーを含む放送部員が担当し、出演者の交渉から送迎、謝礼の支払いまで一人で担当していたようで、まだラヂオというものが何か説明しなければならなかった時代のこと、日々の出演者を決めるだけでも大騒動だった。また、出演者が忘れていて番組に穴をあけることも珍しくなく、大阪放送局では、もともと歌手であったアナウンサーが急遽童謡を歌って穴を埋めたこともあったと記録されている。

黎明期は、音楽番組に人気があったが、洋楽（クラシック、ジャズ）と邦楽が半々で編成された。カフェで流行っていたような流行歌は俗な音楽ということで、昭和初期まで放送されなかった。心中ものはよくてもモダンな色恋の歌は放送できなかったというわけだ。

さて、東京放送局には「開局の日」が二つある。一つは試験送信が許された1925年3月1日。もう一つは仮放送が許された3月22日。NHKは3月22日を放送記念日としている。

試験送信が許された1925年3月1日の放送では、朝9時半に放送開始。まずは佐藤清吉楽長の指揮による管弦楽の演奏が放送された。演奏は海軍音楽隊でアルフォード作曲「行進曲後甲板にて」、ルビンシュタイン作曲「天使の夢」、マスネ作曲「序楽フェドル」など、今では滅多に演奏されない小曲が演奏された。

そして、長い休憩を挟んで正午からは邦楽が演奏された。まずは「J O A K」という高らかなコー



ルサインに続いて哥沢が放送された。

唄・哥沢寅右衛門家元、糸・哥沢寅秀で「そらぼの」「春雨」。

続いて小休憩を挟んで三曲の演奏。

尺八・吉田晴風、三弦・宮城道雄、箏・吉田恭子で「谷間の水車」「六段の曲」「千鳥の曲」が午後一時まで。

午後は、ちょうど来日公演中であつたイタリア歌劇団を呼び寄せてピアノ伴奏で「歌劇 バリアッチより『アダージョ』」「歌劇 蝶々夫人より『晴れたる日』」、そして歌劇「椿姫」中の「アダージョ」などが演奏された。

夜は八時から邦楽と洋楽の取り混ぜ。音楽のバラエティの元祖。

最初は長唄で、唄・芳村孝次郎、糸・杵屋初丸、今藤長十郎による「越後獅子」。

続いて山田耕柞のピアノ伴奏で山田耕柞の歌曲を外山国彦の独唱で放送し、修了した。

当時の設備は、一杯のスタジオの中に一本のマイクがあるだけで、音量調整も何もできないため、演奏のたびにマイクの位置を変えたり演奏者のセツトをし直さなければならなかったから、一曲おわるごとに「次の曲の用意をしますから一分間ほどお待ちください、J O A K」などという呑気なアナウンスがいちいち入った。

実はこの小休止が大切で、不安定だった当時のマイクは時々コツコツ叩かないとどんどん音が劣化するというものであつたし、受信する側も不安定だったから、一局ごとにチューニングを調整しなければならなかった。一曲聞くにも真剣勝負だったのだ。

さて、3月22日の仮放送開始はどうだったか。

朝九時半に放送開始。最初は海軍音楽隊の演奏でクラリネット、ホルンの独奏につづいてウエバーの歌劇「自由射手」より「カヴァティナ」、そしてチャ

イコフスキーの弦楽四重奏曲「アンダンテ・カンタビレ」、マーケの管弦楽「キスメット東洋風曲」、そして有名なビゼーの歌劇「カルメン」からの抜粋曲が景気よく演奏された。

10時からは後藤新平総裁による演説「無線放送に対する予が抱負を見よ」を皮切りに、東京放送局理事長の報告、犬養毅逋信大臣の祝辞(但し、代読)と続き、11時半から時報に続いて読売新聞社提供のニュースに続いて11時50分から「新日本音楽演奏」という標題で、箏・宮城道雄、吉田恭子、新谷喜恵子、牧瀬喜代子、時田初枝、笹田辺尚雄、尺八・吉田晴風、谷富加志による宮城道雄作品「さくら変奏曲」「春の調」「薙露調」「舞踏曲」が演奏された。

続いて1時半から東京日日新聞社のニュースを挟んで1時45分から「哥沢演奏」。

唄・哥沢芝金、糸・哥沢芝勢以による「薄墨」「淀」が放送された。

その後午後は洋楽が放送され、長い休憩を挟んで夜7時からニュース。

続いて「常磐津 乗合船恵方万歳」を唄・常磐津松尾太夫、常磐津弥生太夫、常磐津松重太夫、三味線を常磐津文字兵衛、常磐津文字助、常磐津菊丸で演奏。

その後ベートーベンやヴェルディの歌曲が放送され、9時に天気予報と時報で放送終了した。

折角の音楽の演奏ではあったが、出演者・スタッフとも全員が未経験だったので、放送された音質はひどいもので、特に三味線は金だらいを叩いたような音でしか再生されなかった。ただ、聴く側も、数人で集まって聞かため「レシーバ」をどんぶり鉢に突っ込んで無理やり音を響かせて聴いていたというから本当に「何か聞こえる」こと自体が興味をそそったのだ。

その後7月12日からは愛宕山新局舎の放送となったが、設備は新しくなってもスタジオにマイクが一本しかないのは同じ状況。休憩だらけの放送がおこなわれていた。

ただ、今と違う点があるとすれば、この休憩時間に電話がかかってきて「今の演奏はよかった」などと積極的に評判が帰って来たということ。全曲終わってから「まだ聴きたい」とリクエストをすることも少なくなく、アンコールを放送することもあったという。後にブームとなった電話リクエストの起源が大正時代に遡るということに気付いている研究者はまだいないと思う。放送の枠組みや体裁は今と比べれば幼稚なものではあったが、シンプルなくみだつたせいで、ききと送り手がじかにつながっている感触があったようだ。大正時代から昭和の初期にかけての新聞が継続と家に届いているが、これからどんな発見があるか、楽しみではない。



今後の予定

第三回 扇の会 閑崎ひで女を偲んで
閑崎扇ひでリサیتال

3月19日(日)14時開演 紀尾井町小ホール
出演 舞 閑崎扇ひで

閑崎ひさ女

唄と三絃 西松布咏

演目 水鏡 忘れ唱歌 三国一雪



■たより 第97号

発行 美紗の会
編集責任者 照沼太佳子
デザイン 近藤幹則



主 宰 西松布咏

稽古場 港区白金台三・二・一

白金台プレイス三階

電話 (五四四七) 一四二二

E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL: <http://www.misanokai.com/>